The Tokyo Branch Letter No.60 RSCDS東京ブランチ
東京ブランチレター
September 2003
A Newsletter of the Tokyo Branch of the Royal Scottish Country Dance Society
Editor: Tom Toriyama, 6-9-21, Ohzenji-nishi, Asao-ku, Kawasaki 215-0017 Tel/Fax 044-988-7773

RSCDS 80th Anniversary Dance

ソサエティ80周年を祝って記念ダンス会をひらきます。大勢の会員のご出席をお待ちしております。

11月3日（月・祝）　午後1.00-4.40
東京・赤羽会館（JR赤羽駅東口）
¥1,000　（RSCDS非会員¥1,200）
ミュージシャン　本守明美・村上美枝子
ＭＣ五十嵐成子・吉江紀美・
有田典和・松橋順子

The Chequered Court	42-1
The Cumbrae Reel	28-8
Argyll Strathspey	35-3
Middling, Thank You	15-8
Dancing in the Streets	42-4
Land O'Cakes	29-1
Old Nick's Lumber Room	26-6
The De'il Amang the Tailors	14-7
Autumn in Appin	31-5
The Luckenbooth Brooch	Dickson
Red House	7-2
Jimmy's Fancy	14-11
The Rothesay Rant	Holden
Miss Milligan's Strathspey	Lflt-19
Duke of Perth	1-8
Ex. Mrs Stewart's Jig	35-1

（難曲にウォークスルーあり）

Book 43 Dances 講習会

ことしも２会場でBook 43ダンスの講習会をひらきます。会費はいずれも¥1,000（RSCDS非会員¥1,200）。昼食は各自でご用意ください。

＊東京北会場　9月7日（日）　10 - 4.00
赤羽台東小学校（JR赤羽駅西口７分）
講師　田村妙子・大井冨佐子・松橋順子
ピアニスト　市川洋子・村上美枝子
お問い合わせは　境　雅子 047-368-3873

＊東京南会場　9月23日（祝）　10 - 4.00
川崎市多摩市民館（向ヶ丘遊園北口４分）
講師　鳥山豊喜・若松陽子
お問い合わせは　藤田　淑子 044-954-7235

東京支部クラス

ビギナーズ・クラス
9月8日（月）・22日（月）1.30-4.30
10月13日（月）・27日（月）1.30-4.30
千代田区総合体育館５Ｆ・多目的室 ¥800
講師　小山かおる・鳥山豊喜
10月でひと区切りとなり、11月から半年間、あらたなクラスをひらきます。
担当　松田正子

ステップ・ダンス・クラス
9月13日（土）1.15-2.05　講師　五十嵐成子
神田・さくら館 ¥800
10月11日（土）1.15-2.05　講師　櫻井香枝
担当　池間悦子

インターミディエイト・クラス
9月13日（土）2.15-4.30
講師　田中一美・山田治子
神田・さくら館 ¥800
10月11日（土）2.15-4.30
講師　三木真理・島山あさ子
担当　池間悦子

アドバンスド・クラス
9月6日（土）6.20-8.45
講師　大野悦子・ピアニスト　西森典子
秋葉原・童夢館
10月4日（土）6.20-8.45
講師　林浩子
担当　鈴木百代

New Year Dance 2004

明年1月のNew Year Dance 2004は会場予約の関係でつぎのとおりとなりました。くわしくは次号のブランチレターでおしらせいたします。
1月25日（日）午後1.00-4.40東京・赤羽会館

2004年東京支部合宿

2004年2月14日（土）-15日（日）
石川島研修センター（神奈川県綾瀬市）
ティーチャー：マルカム・ブラウン
ピアニスト：パット・クラーク

2004年支部年次総会終わる

6月7日午後、幡ヶ谷社会教育館において東京ブランチ2004年度年次総会が行なわれ、会員に事前送付した議案書の原案が一部修正のうえ承認されました。くわしくは後日会員にお送りする2004年会報をご覧いただきますが、議事概略はつぎのとおりです。

1．2003年度活動報告および決算報告

Q－クラス、行事、ブランチショップでかなりの余剰金がでている。参加費など、安くしてもよかったのではないか。

A－2003年度末において繰越金ゼロという状態になってはいけないと考え、増収をはかった。来年度においては参加費減額を検討したい。

2．2004年度ブランチ委員選出

あらたに立候補・推薦がなかったため、2003年度委員がそのままあと1年の任期で信任された。

3．2004年度活動方針および予算

Q－委員会の茶菓代や通信費は自己負担ではなく、支部から支給されるべき。

A－そのような方向で考えてゆく。

Q－ブランチショップでかなりの収益を見込んでいるが、換算レートを減額するなど注文者への還元を考えてはどうか。

A－国際・国内郵送料や消費税などを加味し、支部手数料を考えると250円/ポンドの換算レートは高額とはいえないと思う。

4．特別議題

その1．「池間博之氏へのRSCDS功労者授賞を推進する件」－満場一致で承認された。

その2．「本部が毎年、新しいBookを発行する件」－おもしろくないダンスはプログラムに取り上げなければよい、という出席者意見のため、毎年発行の是非について、東京支部としては異議をとなえないこととなった■

RSCDS東京支部

チェアマン　鳥山豊喜（トム鳥山）T/F 044-988-7773
セクレタリ　若松陽子　T/F 042-593-2446
〒191-0022 日野市新井405-3
Email: ywakamat@mail.hinocatv.ne.jp
トレジャラ　境　雅子　T/F 047-368-3873
委員会メンバー　池間悦子　045-982-8528
佐藤裕治　0424-86-3929・鈴木百代　049-296-1766
松田正子　0438-23-0475・藤田淑子　044-954-7235
ホームページ　www.ne.jp/asahi/tokyo/branch/
同担当　吉澤敦子　T/F 0298-41-0767

2004年支部会員は376名

4月末をもって登録申込みを締切り、2004年度の東京支部会員登録はつぎのとおりです。

会員　376名　（昨年394名）

支部からの本部登録会員　272名（同270名）

東京支部による本部発行の出版品（無料配布品、Bulletinなど）の送付は、上記272名を対象に行なわれます■

アンケート回答は振わず

年次総会議案書に同封し、多くの意見が寄せられるだろうと期待した会員アンケートは、記述式の質問だったためか回収数は意外に少なく、わずか15%（59通）でした。25%を超えれば会員意識の反映とみなすこともできますが、この低い回答率では会員が支部活動になにを感じ、なにを期待しているか、とらえることが困難です。

それほどの不満もなく、それほどの期待もしていない、といったところでしょうか。

また、意味不明の記入があったのも特徴でした。たとえば、「ブランチ料金をもう少し安くしてほしい（何の料金？）」、「ティーチャーってなあに？（記入者自身の勉強が必要）」、「活動が表面的（たとえば？）」

2万円もの費用をかけたわりに成果がなかったというわけで、アンケート発案者のチェアマン、大いに反省しています■

来年はブランチ20周年

RSCDS 80周年に引き続いて、2004年は東京支部が生まれて20年になります。ことしから準備をはじめればすてきな記念行事にすることができるでしょう。

いつごろ、どこで、なにを、どんなふうにやればよいか、これもみなさんからのアイデアを参考に計画したく、どうぞご意見をセクレタリまでお寄せください■

Book 45用に"Snow Drops in a Storm"

「2005年のBook 45に入れるダンスは支部出版物の中から」の本部方針にもとづき、委員会で検討した結果、10周年記念ダンスコレクションの"Snow Drops in a Storm"（稲垣俊・作、村上美枝子・作曲）を選び、本部に送付しました。各支部が提出したダンスとの競合に勝ち抜くことを期待しています■

Book 44 にはどのダンスを？

—本部から評価依頼—

Book 44 のダンスは選考過程にあり、本部は負担を軽くするためか、各支部に予備選考を依頼しています。東京支部にも 6 つの候補ダンスが提示され、ランク付けをやってほしいと依頼されました。Exams Tokyo 2003 および年次総会準備の時期にあたったため、委員会判断で経験ある数グループで踊っていただき、その評価をもとに支部評価を行ない、本部に回答しました。

ランクは、

A：動きに目を見張るような新しさがあり、Book に載せるべき楽しいダンス。

B：動きに目新しさはないが、スムーズで候補に入れてよいダンス。

C：ありきたりの動きで、あまり面白さもないダンス。

D：記述だけではどうにも動けず、動きと動きのつなぎにムリがあるダンス。

本部から送られてきた説明書には、ダンス番号、リズム、踊り方が書いてあるだけ。

＊ダンスのタイトルはない

＊音楽のタイトルはない

＊作者名はない

＊ダンスの由来も書かれていない

というわけで、これらに惑わされることなく、純粋にダンスのみを評価すべしという意図がこめられています。6 つの候補ダンスの中には、あきらかに “C” 以下というものもありました■

フィーチャード・ダンシズ 2003-04

(Tom Toriyama)

本部発行 Newsbrief No. 10 に 2003 年-04 年の行事ではこれを踊れ、として 10 ダンスを指示しています。これは他の支部行事に参加したときでもダンサーが楽しめるように、共通のダンスを選定したものです。ダンス会で踊るダンス数は最大 20 ほどであり、これらのフィーチャード・ダンシズをすべてプログラムに入れると、残りの 10 ダンス選定に大きな制約を受けることになります。

経験の浅いダンサーにとって、指定 10 ダンスのなかには楽しめないものもあります。また、クラスの貴重な時間をフィーチャード・ダンシズに費やし、もっと楽しい踊りが排除されることもあります。10 ダンスのなかから、数ダンスをプログラムに取り入れればよい、と考えるべきでしょう■

RSCDS ウィンタースクール

2004 年 2 月 26 日（木）-3 月 2 日（火）
ディレクタ：ブルース・フレイザー
アソル・パレス・ホテル（ピツロッホリ）
ブレア城におけるボール（月）を含む
参加費 292 ﾎﾟﾝﾄﾞ/人
（ホテルのため原則ツイン部屋）
申込締切り　10 月 17 日（金）
申込用紙はセクレタリ若松陽子にお申越しを■

パリ・ブランチ・ウィークエンド

—創立 20 周年記念—

2004 年 4 月 10 日（土）-12 日（月）
パレス・ボーモン
（フランス南西、ピレネー・アトランティク県の Pau ポー市）
ティーチャー：アン・ディックス
ピアニスト：ジェニファー・ウィルソン
ボールのミュージシャン：キース・スミス＆グリーン・ジンジャー
参加費用その他は 10 月末までに決定
お問い合わせはチェアマン鳥山豊喜まで■

会員のご支援ありがとう

— Exams Tokyo 2003 —

当支部主催の Exams Tokyo 2003 は受験トレーニングを含め 4 月 11 日から 5 月 9 日にかけて行なわれ、東京・埼玉両支部会員の積極的なご支援をえてぶじ終わりました。フル資格試験で 17 名、予備試験で 10 名の合格者をえたことは、受験生自身の汗と涙もさることながら、のべ 500 人以上にわたる関係者のご支援の成果であり、あつくお礼申しあげます。とくに埼玉・宮代のみなさんには会場確保から日々の細かなところまでご面倒をいただき、深く感謝しています。

フル資格試験合格者（21 名）

飯田澄子、増田静子、日野洋治、谷川とよ、堀澄子、石田由美、渋谷明美、三木真理、中島淑子、島山あさ子、白浜雅子、田中一美、山田治子、山田とし子、佐藤峯子、篠塚昌子、吉江紀美、大西弘美、佐藤真理子、佐野亜輝子、河口久美子

予備試験合格者（11 名）

岩瀬よし子、疋田千鶴子、金田治子、兼松千奈美、小杉由美子、丸田正子、西森典子、高松美枝、渡部多美子、山田美代子、野村雅子

（東海支部主催のコース参加者を含む）

（次ページに関連記事）

日本におけるツアー　（ヘレン・フレーム）

わたしはセント・アンドルーズでたくさんの日本人ダンサーに会ってきましたが、フル資格試験のチューターとして日本に来てほしいと頼まれたとき、とてもありがたいことだと思いました。

旅行日程は細かなところまでゆきわり、成田空港で親しい人たちの顔を見て、とてもうれしく感じました。

皇居・坂下門で

トレーニング・クラスはチェアマン、セクレタリ、実行委員、コース・コーディネータ、関係者によってたいへんよく計画されていました。通訳、ミュージシャン、そして休憩時にわたしたちに茶菓を準備してくれたレディのみなさん、それぞれがこの行事の成功を目指しておのおのの役割をきちんとはたしていました。トレーニングの会場と宿泊施設も立派でした。

受験生の事前準備状況とダンシング実技は「ハイ・スタンダード」の一語につきます。コース中、受験生の熱意と献身はとどまるところを知らなかった、といえます。ダンシングとティーチングのすべての場面において、聞き、学び、向上したいという意欲は、わたしにとって最大のよろこびであり、満足感をあたえてくれるものでした。受験生とチューターとの一体感を感じ、わたしはみなさんへの尊敬さえ感じました。

予備試験後の２年間において、ほとんどの受験生はいかにティーチングすべきかを助言され、成果をあげていると感じました。地域によってはそのような機会に恵まれず、先輩ティーチャーの定常的な助言をうけるのがむずかしい、ということも知りましたが、有望な受験生に対してはスキル（ダンスの事前分析、踊り方の導入方法、観察、指導の時間配分）を伸ばすため、すべての地域において先輩の助言がうけられるよう、なんらかのアレンジ、配慮が必要と思います。

トレーニング・コースを終えて各所で指導し、これはわたしにべつの大きなよろこびをあたえてくれました。わたしのホスト、ホステスはすばらしい名所を案内してくれ、どこにいってもあたたかな心と、恐縮するほどのもてなしを経験しました。

さらに、良質のテクニック、フォーメーションとダンスの理解度にも感心しました。スタンダードを向上したい、という意欲がいつもゆきわたっていました。

この文をまとめるにあたり、「シビアなコメントを」と求められましたが、率直にいって、この依頼に合うものを見つけるのは困難です。

受験生たちの専心と姿勢は優秀であり、関係者の心配りに圧倒されました。

わたしにとってほんとうに忘れられない経験となりました。　（2003 年 7 月）

ENJOY HAPPY DANCING!

ティーチャーズ・ミーティングにおける反省点

７月５日、20 人のティーチャー（新ティーチャーを含む）が出席して Exams Tokyo 2003 の反省を主題としたミーティングがひらかれました。おもな反省点、意見、感想はつぎのとおりです。

◇支部から生徒、関係者への連絡に不十分なところが見受けられた。どこで、だれが、なにをするのか、不明なところがあった。

◇Exams 合格後のブランチ、ソサエティへの貢献が重要である。

◇Confidential Report を「推薦状」と訳しているが、これは「内申書」と訳すべきである。生徒の長所・短所をあからさまにしるし、その生徒の資質がソサエティにとってどのように重要かを書くべきである。

◇Confidential Report の内容と生徒の申請書の内容が同じというものもあった。Confidential Report 記入者はとおりいっぺんの内容ではなく、もっと真剣に Report すべきである。

◇チューターのヘレン（フル資格試験）にとっては異文化との遭遇であり、こちらもヘレンも、はじめのうちは試行錯誤という状況だったが、やがて意思、理解が通じるようになった。

◇フル資格試験の宿舎は二人部屋だったが、１週間という期間を考えれば、費用がかかっても個室にすべきである。

◇筆記答案の和文英訳において答案が日本文になっておらず、たいへん困った。質問を誤解したため、誤答という事例もあり、生徒はなにを質問されているのか、まずじっくり考えるべきである。

◇エギザミナーの「Good!」ということばは、日本語に直せば「お疲れさん！」くらいにあたる。「Good!」を試験の評価と解釈すべきでない。

◇予備資格試験で「チューターが日本人」の利点をつくづく感じた。生徒とチューターとが的確に対話できる。日本でのチューター・コースを考えるべき。

◇本部はマニュアルを改訂中で、日本語版への取り組みはその後となる。著作権料・コピー防止策など発行までに解決すべき問題がある■

サマースクール　とんでも体験記

（岡　玲子）

４度目のサマースクール、今年はいろいろなことがありました。

その１は、Week 1 で University Hall の火災報知器が鳴ること４回。１～２回なら過去にもありましたが…。なんとディナータイムのさいちゅうに２回ということも。そのころにはみな誤作動ということに慣れてしまって、ワイングラスやケーキののった皿を片手にゆうゆうと下の芝生に避難。感知器の下に灰皿があったのが原因とか。ほんとかどうか？ Week 2 では１度も鳴りませんでした。

その２．Forth Bridge が工事中で、日曜日は汽車が不通だったこと。1:15 発の Dundee 行き、時刻表にあるけどプラットフォームの表示板に出ない！バスでの振替え輸送になっていることがわかって、事故か何かだろうと乗り込んだものの、何のアナウンスもなし。渋滞の Forth 道路橋を渡ってすぐの駅（Inverkeithing?）で下車させられ、やれやれやっとここからは汽車だと思ったのに、なんとまたここから別のバスに乗り換え。そして、結局 Leuchars 駅までぜんぶの駅に立ち寄りつつ走ったのです。主道路から折れて駅に着き、また道路に出てつぎの駅へ、というルートです。途中駅でトイレに行きたいというと、Leuchars まで待てとのこと。やっと着いて、タクシー待ちのあいだにプラットフォームを走ったのに、トイレのドアは施錠してあって…。University Hall まで長かったことでありました。

バスを降りた人に、どうしてこうなったのか知りたいと尋ねると、彼が紙に書いてくれたのは、「Train conductor was sick!!」。真顔ですよ。
「エー！？　いくら汽車があてにならないことで有名なこの国とはいえ…まさかぁ」「ストかしら」。クレメントあつ子さんから、橋の修理工事で日曜日は当分不通、帰りも振替えバスとお聞きしたのは少しあとのこと。あれは冗談だったのかいまも謎です。

往復きっぷを買ってしまっていたのですが、帰りはチャーター車に変更。楽でした。半日がかりのバスの旅で、「いつもと違う風景を見られたからよかったね」と思うことにした私たちでした。

Week 2 だけ参加されたＴ氏とＳ氏、（もしかして Course 2 の方々も）この苦労を味わわないですんだのは、大きな犠牲のたまものなのですヨ。

その３．Week 1 の金曜日のディナーをすませて部屋に戻り、バッグを机におき、トイレに行きました。戻ると男の人が中にいるのです。一瞬お掃除の人？　と思ったけど、そんなはずはないし…ドロボー！？　とたんに頭の中は真っ白。口から出る言葉は「What！」だけ。クローゼットをのぞいていた男は「Sorry」を連発しつつ廊下へ。片手に持っているのは刃物ではなく紙らしいけど、心臓はドキドキ。男が防火扉の外へ逃げたのを確かめて、貴重品をチェックし、盗まれた物がなくてホッとする。クローゼットとサイドテーブルの扉が開いていたが、ほんの短時間で私が戻ったので、物色していただけらしい。

同行の３人に報告し、無事を喜び合う。ここで、まだ大勢が食事中だったことを思い出し、気をつけるようにアナウンスしてもらう方がよいと思って、あつ子さんに告げるために食堂へ。

一件落着と思っていたのだが、警官が事情聴取したいという連絡がきた。あつ子さんに通訳していただいた。男を見つけたのは一歩部屋に入ってからか、それとも廊下でか、など自覚していないほど細かいことや、私の出生地、旧姓も。２人だけの時にはやさしい言葉を選んで日本のことや、長岡のことなどを尋ねてリラックスさせてくれたり、優しい警官だった。

この日は楽しみにしていたケイリーで、Japanese Ladies は“春のうららの･･･”を２部合唱しようと２度も練習をしていた。また午後のオプション・クラスでも発表することになっていた。なのにこのあと、パトカーで街中の捜索に同行してほしいといわれる。このときまでには、他に同宿の日本人２人がこの男を見ていることがわかっていた。Ｈさんは部屋に入ろうとしたとき、向う側にいる男に気づき、「Thank You」と思わずいったけど、へんな風体で気になった由。Ａさんは渡り廊下で外に目をやったら、植え込みで男が中をうかがうような様子を見たという。伸びた髪とヒゲ、精気のない顔、服装など３人ともほとんど同じ印象だった。みんなで探す方がよいのではということで、すでにスタートしていたケイリーのプログラムを変更し、私達の出番を早くしてもらうことになった。

他の日本のメンバーは出番変更の突然のアナウンスにびっくり。でもそこは強力な面々、練習の成果を発揮して、途中にピアノとヴァイオリンが入った構成はすばらしかった。チョット自画自賛ですね…でもホントに拍手がなかなか鳴り止まなかったのですよ。

さて結局、他の２人は同乗不要ということになって、あつ子さんと私とでパトカーに。ゆっくり走っていても大勢が行きかう街の中、格子のはまった窓からでは、“見つけるられるかなあ”という気持ちでした。何か自分が罪人のような気がしたり、パトカーに手を振る若者がいるとチョットよい気分になったり。ゴルフコースも行ったことがない奥まで走り、コースのグリーンと夕焼け空がそれはそれはきれいでした。

見つけられずに帰り、続きの聴取を受けて書類にサインし、やっと戻ったケイリーはもう終盤、

がっかりしているところでまた呼ばれる。犯人らしい男がつかまったので確認してとのこと。面通し？　玄関のガラス越しに外の男を見ても、日暮れの遅いスコットランドとはいえ、この時間では夕闇でよく見えない。外に出てよいといわれても、警官の陰からのぞくだけでは、離れていてはっきりしない。もっと大柄だったと思うけれど、２人の警官の間に立つ姿はそうでもない。ズボンも違うかも。でも髪も風体も上着も記憶のままだ。「多分そう思う」としか答えられない。記憶の不確かさに我ながらあきれる。明日部屋の指紋を取るため、別の部屋で寝るよういわれて A21 号に。何もないがらんとした部屋は怖さをあらためて感じさせ、そのうえ“もしも私の証言で別の人を犯人にしてしまったらどうしよう”とも思って、ベッドに入っても明け方まで眠れなかった。この件があってから、隣の部屋に行くときも鍵持参となりました。

翌日あつ子さんが訳した私の証言を、他の人がチェックする必要ありとのことで２人が協力。あつ子さんの文なのですが、形式として必要だったようです。犯人を見た他の２人も調書を取られ、これだけ大勢の参加者の中で男を見たのは日本人だけ？　とも思いました。日本人でスタッフだったあつ子さんはほんとに大変でした。

拘束期間中に本人が犯行を認めなければ、来週法廷での証言にも協力を、といわれていたけれどその呼び出しはなく、きっと白状したのだろうとホッとしました。Chairman の Jean さんと Director の Johan さんに「ごめんなさい。大変だったね」と声をかけられ、「何も盗られなかった？」という Jean につい「Yes」と答え、「No」というんだったと英語のダメな私はまた失敗したのでした。

こんないろんなことがあった Summer School でしたが、恐怖は忘れたし、さんざんな出来事も面白かった想い出に変身しつつあります。きっと私にとっては一番思い出に残るスクールになるでしょう。そして早くも、また行きたい気持ちにとりつかれている私です。

（ボケ進行中で記憶のあいまいなところがあります。間違っているところがありましたら、ご一緒だった皆様お許しを）■

吉澤さん、工藤さん合格！
―セント・アンドルーズで―

ことしの Course 2 試験クラスで、
吉澤敦子さん（土浦市）－フル資格
工藤祐亨さん（十和田市）－予備試験
が合格しました。おめでとうございます。これからもいっそうのご活躍、精進を期待しています。

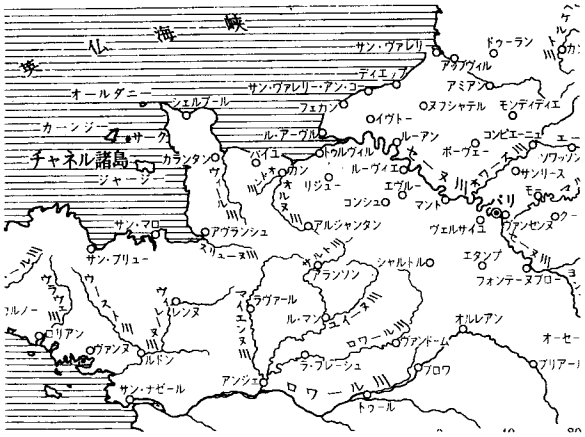
第五十一師団のリール

（マイケル・ヤング）

原編集長注．この興味深い記事を書いてくれたマイケル・ヤングに感謝している。本稿は以前ニュージーランド支部の機関紙およびカナダの TACTALK に記されたものである。ジミー・アトキンスン自身の記事が 1954 年の当支部 “The Reel”に載っているが、ダンサーは新しい世代にかわりつつある。この記事がそういう人たちにもおもしろいとうけとられることを希望している。

マイケル・ヤングはパース出身、英国輸送兵団の中佐で、現在西ドイツ〔記事掲載は 1983 年〕に駐留している。かれの趣味は歴史とスコティッシュ・ダンシングで、所属する連隊の史実を研究しているとき、1938-40 年における先任者、ハリス・ハンター中佐と『第五十一師団リール』のつながりに出会ったのである。

1940 年 6 月 12 日、第五十一ハイランド師団はサン・バレリ・アン・コー (Saint Valery-en-Caux) でドイツ機甲師団に包囲され、降服した。フランスにあったイギリス欧州派遣軍中、最後に取り残された将兵であった。小さな漁港の町で、司令官ビクター・フォーチューン少将は、のちに北アフリカ戦線で勇名をはせるエルヴィン・ロンメル将軍に降服したのである。師団の一部将兵は英本国に脱出できたが、ハイランドの誇りである数千人の男たちは、1945 年の戦争終結までとらわれの身となった。



訳注1．第五十一師団の主力戦闘部隊
シーフォース・ハイランダーズ連隊（本部フォート・ジョージ）　第２大隊・第４大隊
クィーンズ・オウン・カメロン・ハイランダーズ連隊（インバネス）　第４大隊
ブラック・ウォッチ連隊（パース）
　第１大隊・第４大隊
ゴードン・ハイランダーズ連隊（アバディーン）
　第１大隊・第５大隊
アーガイル＆サザランド・ハイランダーズ連隊（スターリング）　第７大隊・第８大隊

左手前ロンメル将軍、となりがフォーチューン少将。宣伝相ゲッベルスからもらったロンメル個人のライカⅢcで撮影

訳注2. ウィンストン・チャーチルは著書『第二次世界大戦』でこう述べている。

「六月十日、激戦ののち、第五十一師団はフランス第九師団とともにサン・ヴァレリー周辺まで後退して、海路撤退を期待した。十一日から十二日にかけての夜間は、霧が深くて、船で軍隊を引き揚げることはできなかった。十二日の朝までには、ドイツ軍はすでに南海岸の断崖まで到達し、浜辺は直接砲火にさらされていた。

町に白旗があがった。フランス軍団は八時に降服し、高地師団の残存部隊も、十時三十分には降服せざるをえなかった。イギリス兵八千人、フランス兵四千人が、ロンメル将軍指揮下の第七パンツアー師団の手中に落ちた。フランス軍が十分に時間があるときに、わが軍のルーアン撤退を許さず、待機させたために、結局ル・アーヴルにたどり着くことも南方へ後退することもできなくなり、やむなくフランス軍団とともに降服したというわけで、これには私は憤慨せざるをえなかった。高地師団はひどい目にあったが、のちに、そのあとに続いたスコットランド人が、第九スコットランド師団と合体して再建し、エル・アラメインを起点にしてあらゆる戦場を踏破し、ライン川を越えて最後の勝利をおさめるまで進軍し、敗北の汚名をすすぐことになった」（河出文庫版－佐藤亮一訳　1983）

チャーチルと第五十一師団パイパー（1945年3月 ドイツ）

捕虜 (Prisoner of War, POW)となった第五十一師団将兵のなかに、アーガイル&サザランド・ハイランダーズ連隊第七大隊のジミー・アトキンスン中尉がいた。かれはサン・バレリ陥落の1週間前にドイツ軍に捕らえられていた。アトキンスン中尉は戦争前、住んでいたアロアの町でいくらかカントリー・ダンスを経験しており、捕虜となってオランダのほこりっぽい道を、重い足どりで行軍しているとき、ときとしてかれの心を占めたのがスコティッシュ・カントリー・ダンスであった。

新しいダンスの核はかたまっており、基本的な概略はすでにできていた。ダイアゴナルのBalance in lineはセント・アンドルーズ十字を意味し、師団将兵の戦闘服に縫いつけられていたマークであった。(有名なHD/Highland Divisionマークは機密保持のため、欧州にむかうときにとり外された)。"Scottish Reform"の導入部をすこし変化させてダイアゴナル・フィギュアとし、Hands round & backは"Hamilton House"をそのままとりいれた。

フランス、ベルギーをへて、数週間のぐったりする移送ののち、捕虜の集団はライン川の町、ヴェーゼルWeselに集結させられた。ここでバイエルン組、他のドイツ地方組、ポーランド組にわけられ、アトキンスン中尉はほかの仲間とともにバイエルンのラウフェンLaufen〔英語読みでローフェン〕にむかった。ザルツブルクに近いラウフェンの第VIIC 捕虜収容所が数か月間のすみかとなった。

前列左端ピーター・オリバー、後列左から2人目ジミー・アトキンスン（1941年8月 収容所で）

収容からまもなく、シーフォース連隊第四大隊のピーター・オリバー中尉がハイランド・ダンシング・クラスをはじめ、ジミー・アトキンスンもそれほど熱心ではなかったが、これに加わった。また、カントリー・ダンスの知識はかぎられたも

のであったが、二人はリール・クラブも結成した。クラブはみんなの好意的な支持をうけ、収容所間の移動でリーダーは入れ替わったが、帰還までの5年間、活動がつづいた。

ラウフェン収容所本部をえがく絵はがき。1943年12月、Newdenham, Englandあてに差しだされたもの。

ラウフェンの会場は病棟ブロックのなかにあり、階段一番上の踊り場がそこにあてられた。ほかの休憩場所は人が多く、ダンスにふさわしい唯一の場所がここであった。リーダー（士官）は昼食のあと、週に3回つどっていた。はじめのころは粗末な所内給食だったので参加者は少なかったが、やがて赤十字をとおして英国から食料の小包がとどくようになると、毎回約20名が集まるようになった。

楽器はすべてドイツ軍に没収されるかこわされていたので、リーダーはカウントを叫びつづけるか、口笛でメロディを吹くかであり、いずれにしてもテンポは正確ではなかった。ポーランドのポズナニに移動したとき、赤十字経由でチャンター〔バグパイプの指管〕がとどき、ドイツのビベラッハではスクィズ・ボックス〔アコーディオン〕を入手することができた。これで音楽による伴奏は大きく改善された。

1940年の時点で、大きな問題はダンスの踊り方であった。なじみのスタンダード・ダンスはみんなよく覚えていたが、個々のダンスでどう動くかは推量となり、即興による動きをその箇所にあてはめることもあった。「このあいだの踊り方とちがうよ」という批評をかわすため、ダンスの中身を書き留めることが行なわれた。もちろん戦争の後期にはSCDSのブック〔Book 12は1938年に刊行されていた〕が捕虜郵便で到着し、この問題は解決した。

1940年の11月ごろ、ジミー・アトキンスンはピーター・オリバーに新しいダンスのアイデアを話し、二人で内容を書きあげた。収容所のコンクリートの上で踊り試しが行なわれ、まあまあのできばえをおさめた。

上級の捕虜のなかに師団修理大隊指揮官のトム・ハリス・ハンター中佐がいるのを見つけたとき、二人にチャンスがめぐってきた。中佐は戦争前、パース支部のチェアマンであり、中佐の夫人も熱心なダンサー兼オーガナイザーで、戦争中はパース支部のセクレタリをつとめていたのである。ハリス・ハンター中佐はよろこんでカントリー・ダンス・クラブに加わった。

中佐は最初の8小節がSCDSのやり方にあっていないと指摘し、Cast off three places（この踊りは5 couples set であった）のあと、Leading up to corners のほうがよいと助言した。この導入部は"Lady Susan Stewart's Reel"の8小節をもってきたものである。こちらのほうがダンスにふさわしいとされ、説明書に書き込まれた。

ヘクター・ロス（シーフォース第四大隊）はパイパーであり、収容所ハーモニカ・バンドのリーダーでもあった。かれはこのダンスのために6/8拍子の曲をつくったが、残念なことに譜面は失われてしまった。ダゴード・スチュアートも1944年の末に曲をつくったが、故国にもちかえったのは1945年であり、普及にはまにあわなかった。

ハリス・ハンター中佐の指導のもとでクラブはだんだんと上手になり、レパートリもふえていった。そのころラウフェンの下級士官のほとんどはポズナニの第XXID収容所、ついでバイエルンのビベラッハ Biberach に移された。だが、1941年の秋、リール・クラブ員はドイツ、ウェストファーレンのヴァールブルク Warburg の第VIIB 収容所にふたたび集うことになった。ハローウィンの日〔10月30日〕、そのダンスは第2食堂ホールで司令官フォーチューン少将に披露された。これが最初の公開であり、第五十一師団を代表する無私の行為に、ハイランド師団の捕虜たちは敬服と情愛をふかく感じた。司令官はこのダンスを"51st Country Dance (Laufen Reel)"と名づけることを承諾した。

ハリス・ハンター、ジミー・アトキンスンはそれぞれダンスの内容をスコットランドに書き送った。送り先はパースに住む夫人、アトキンスン中尉の場合は婚約者のイースター・ロスであった。だが故国からの返信にダンスについての記述はなにもなく、収容所からの手紙が相手にとどいていないのはあきらかだった。

調べてみると、ドイツ軍はこの手紙の検閲に手間どっていた。巧妙に暗号化された秘密の軍事通信と受けとられたのである。

ハリス・ハンターは捕虜に対する支出担当主任官で、相手との窓口という立場を利用し、ドイツ軍検閲官にダンスをデモンストレーションした。こうしてハンター中佐の手紙はぶじにパースに配達されたが、ジミー・アトキンスンの手紙はついに英国にとどかなかった。

ハリス・ハンター夫人は他の人の支援もえて、パースのダンス・クラブでそのダンスをとりあげた。夫人は説明書を印刷し、配布した。おどろいたことに、ロンドンのような南部を含む全国から資料を送ってほしいとの依頼が舞いこんだのである。ミス・ミリガンは150ポンド以上の売上げを赤十字に寄付し、60ポンドをハリス・ハンター夫人に送った。夫人はこれで蓄音機その他を求め、収容所に送りとどけた。

いまとなっては正確に状況を述べるのは困難であるが、ここでダンス・タイトルの移りかわりを書きとめておこう。パースで発行された資料のタイトルは "The St. Valery Reel"となっている。これは"51st Country Dance (Laufen Reel)"という武骨な名前よりも、こちらのほうが売れると考えたからであろう。事実、戦時中ブルーレーベル社は "St. Valery Reel"の名前でレコードを製作している。元捕虜にとって、このタイトルは思い出したくない敗北を思い出させるに等しい、けれども第五十一師団の名を忘れてもらっては困る、というのが心情であった。ミス・ミリガンの問い合わせに対し、ハリス・ハンターは "Reel of the 51st Division"をタイトルにしてほしいと回答した。兵隊のために、兵隊によってつくられたこのダンスには、これがよりふさわしいタイトルである。↙

せては、と進言した』という話が一般には信じられている。残念ながら、現在この信ぴょう性を確かめるのはむずかしい。皇太后は 1980 年、この件を質問されたが、どんな人物がいたのか思いだせない、と答えられた。

ソサエティ執行委員会は大戦勝利の年、Book 13 にこのダンスをのせるのがふさわしいと考えた。このとき、ダンスはふつうのやり方にあわせる決定がなされ、4 couples set のダンスに直された。よって Cast off three places はもはや踊られていない。

タイトルが何回もかわったように、その曲も変化した。前述のとおり、最初の音楽はヘクター・ロスが作曲し、戦争の終わりごろダゴード・スチュアートが別の曲をつくったが、それらの曲がつかわれることはなかった。捕虜たちはこのダンスを "My Love, She's But a Lassie Yet"で踊っていた。ダンスに結びつけられる曲は "Drunken Piper"であり、これは戦時中パース支部がいつも用いていたものである。現在ではこの曲が『第五十一師団リール』の音楽として、あまねく知られている。
("Reel of the 51st Division" by Michael Young, from The Reel No.165, Aug-Oct 1983. By the courtesy of the RSCDS London)

付記1. ジミー・アトキンスンの証言　「もし、われわれがホグマニーやセント・アンドルーズ・ナイトでパーティをやれないなんてことになれば、暴動が起こるぜ」とドイツ人たちを説得したんだ。いろいろなところで楽器を手に入れて、パイプバンドをつくったり、ハイランド・ダンシングをやった。わたしは一つダンスをつくった。サン・バレリ・リールというやつだ。でもみんな敗北を祝うなんていやだったんだね。『第五十一師団リール』に名前がかわってしまったよ。("Scotland's War" by Robertson & Wilson, 1995)

ジミー・アトキンスンの収容所パイプバンド

はじめSCDSはこのダンスの受け入れに難色を示した。しかしダンスは大衆にも知れわたっていた。『エリザベス王妃（いまの Queen Mother）が実際にこの踊りをみて興味をひかれ、ロマンチックなきっかけであるが、新しい Book にこれをの

付記2. 追悼—わたしたちに "The Reel of the 51st Division"をあたえてくれた人、ジェイムズ（ジミー）・アトキンスンが 1997 年 1 月に亡くなった。84 歳であった。"The Reel of the 51st Division"は、RSCDS が出版した最初のモダン・

ダンスであった。

かれはアーガイル&サザランド・ハイランダーズ連隊に入り、1940 年 6 月、第五十一師団がサン・バレリで包囲され捕虜となったとき、ダンスのアイデアがうまれた。のちにドイツの収容所にいるとき、ピーター・オリバー中尉やほかの将校の助けをえてアイデアが結実したのである。

アトキンスン元中尉はクラックマナン県でくらし、1996 年 11 月、"The Reel of the 51st Division" とその生い立ちにかんする BBC スコットランドの 30 分ドキュメンタリー番組に出演した。このなかで『なぜダンスをつづけたのか、三つのわけがある。それは、温まりたかったため、健康のため、そして楽しみのためさ』とコメントした。アロアで行なわれた追悼式には多くの戦友たちと関係者が参列した。ソサエティからは、わたし〔チェアマン〕が出席した・・・ビル・クレメント。

(RSCDS Bulletin No.75, Oct 1997) ■

本部のある一日

（セクレタリ エルスペス・グレイ）

わたしの人生の楽しみの一つに女声コーラスがあります。ちょっと前、ささやかな収益をあげるために教会の行事で歌ったことがありました。歌い始める前、お客さんにわたしたちのなりわいを紹介しました。理学療法士、野外活動指導員などで、そのうちの 1 人が RSCDS のアドミニストレータ/業務統括者でした。出演中にお客さんたちはだれがどんな仕事についているかわかったようで、わたしたちも終わるころには仲間の仕事がわかりました。

コーラスが終ってお茶になったとき、1 人の女性がわたしに話しかけてきました。ずいぶんむかし、そのひとはコーツ・クレッセントで楽しく働いていたということでした。オフィスでは毎日みんな気楽な服装で、石炭の暖炉のまわりにはお茶とクッキーがあり、その日の郵便物を処理していたそうです。わたしはかの女にこう話しました。「すてきな事務所はいまもそこよ。炎はないけれど暖炉もそのまま。でも、仕事のペースはとんでもなく変わったわ！」。

本部の典型的な一日について述べよ、といわれてもこれはたやすくありません。同じ日は２日とありません。毎日が異なるのはとても愉快であり、挑戦でもありますが、定常業務をこなすのもやっとというところです。わたしたちがやっている定常業務は、毎日の仕事というよりも、むしろ月次あるいは年次の作業です。とはいえ、この機会に本部でどんなことが行なわれているか、みなさんにお伝えしようと思います。

では、本部チームにはいったいどんな人がいるのか、ということになりますね？　わたしのほかに、まずジューン・ディック June Dick。わたしの右腕です。スーザン・ピリー Suzanne Pilley は財務会計と会員係をやっています。ケイト・ローリー Kate Lawrie は財務会計・総務補佐、そしてダンス会場の内外でみなさんよくご存知のアイリーン・ワット Eileen Watt。アイリーンは事務総括です。

そしてわたしたちのいる場所ですが、RSCDS の本部はエジンバラの中心にあって、1825 年ごろに建てられた地上 3 階・地下 1 階の建物の一角にあります。天井が高く、きれいなひさしのある建物です。地下部分は倉庫、RSCDS 史料庫、大型コピー機、用紙棚になっています。地下室の状態はよいといえませんが、会議室設置と在庫管理の合理化計画がスタートしました。1 階はわたしたちがほとんどの時間を過ごすところで、1 室はわたし用、ケイトとアイリーンの相部屋、スーザンとジューンの相部屋というようになっています。ほかに大きな会議室があり、ここにはミス・ミリガンの肖像画が掛かっていて、ワシのような目が活動を見守っています。

セクレタリ補佐の仕事に加え、ジューンは教育訓練委員会の書記とスクール活動小委員会（サマー、ウィンター、イースター・スクール）の書記をやっています。各スクールの準備に多くの時間がさかれ、しかもこれは通年です。かの女の日常とは、サマー、ウィンター・スクールの申込書と参加料の処理、スクール校長やスタッフとの打合せ、セント・アンドルーズ大学や他の施設との宿泊の調整、クラス用各ホールの予約、ティーチャー、ミュージシャンの合意の取り付け、申請書とパンフレットの原案作成と印刷発注、わたしの重要案件に関するわたしとの打合せ、ジューン担当の委員会におけるアクションのフォロー、本部にとどくいろいろな質問事項の仕分けです。

ケイトはおそらくもっとも日常業務をこなしている人間でしょう。かの女は注文を集計し（週に約 40 件）、送り状をつくり、入金を処理し、荷造りを担当しています。出納簿の管理、新入会員用のパッケージの送付、差出し郵便物の処理を行ない、在庫品を地下から運び、会議用や郵送書類のコピーを行なっています。

アイリーンの職務は文房具、本部販売品、什器備品その他の管理です。また会員サービス委員会の書記をつとめ、そして試験実施の責任者です。かの女の日常業務とは受注済みの品切れ品をまとめ、販売品と文房具を注文しています。試験実施についてブランチとエギザミナーとの連絡を担当し、エギザミナーの出張をアレンジし、委員会会議のフォローとしてレター作成や電話連絡を行なっています。

左からスーザン・ピリー、エルスペス・グレイ、アイリーン・ワット（エルスペスの執務室で）

スーザンはブランチ担当で、会員登録や年会費受領の仕事をやっています。総括・財務委員会の書記でもあり、ユース関連活動とそのリーダーのフィオナ・タンブルのサポートも行なっています。年会費の預け入れ、受領書とおつりの小切手発行、データベースのインプット、販売品送り状の作成、貸借対照表への帳票作成がかの女のデイリー・ワークです。

さてわたしですが、セクレタリ/アドミニストレータとしてのわたしの仕事は、たくさんの責任に取り囲まれています。どの一日をとっても途方もない案件と活動推進事項があります。

まず、一杯のコーヒーであたまをシャキッとさせたあと、電子メールと手紙に目をとおします。ジューンに意見を聞きながら、ミリガン奨学金の申請、功労者表彰申請、問い合わせ回答など率直な案件を読みます。チェアマン、委員会委員長その他の人に検討してもらうべきものがあれば、案件を記録し、そのコピーをとります。すぐに回答できるもの、たとえばソサエティ規約、保険、インターネット、日取りの確認、その他の問いにはただちに対応しています。チェアマンとの電話のやりとりがないのが２日もつづくということはめったになく、電子メールも連日です。出版物に関する印刷業者との打合せと配布先のチェックもわたしの仕事です。レコーディングの調整もあります。バンド、委員会代表や録音スタジオとの交渉です。ことの大小をとわず、顧問弁護士との電話や会議は通年のことです。そしてスタッフに対する管理責任、建物の管理、そして各委員会へのプッシュなど、イスを暖める時間がないほどです。

このような仕事に並行して、ひんぱんにかかってくる電話にも出なければなりません。CD やブック購入を求めて事務所にやってくる人、情報がほしい人、何回か定常的にやってくる人、ぶらり立ち寄った人、こういった人にも応対しています。だれもが外部と連絡を取りあっているため、昼休みの休憩は交替でとっています。

こういった応対がまったくできないときもあります。たとえば、全ブランチに大量の郵便物を送るときがこれにあたります。みな机に向かって印刷物をとり、部数を照合し、封筒につめ、封をするという作業です。照合のため、会議室の大テーブルは実際すきまなく埋めつくされます。わたしたちはスタッフ会議を定例でやりたいと思っていますが、それ以上に、世界（そして RSCDS）を、完全という名の列車に載せたあと、みんなで一緒に食事をとりたいと思っています。

本部には５人のスタッフがいますが、年次休暇、振替休日、病欠により、４人でオフィスを守っているというのがしょっちゅうです。みなさんの本部スタッフはいそがしい日々をおくっています。ですが、わたしが言えるのは、スタッフはフラストレーションが大嫌いであり、いつも愉快にやっている、ということです（毎朝、暖炉のそばにクッキーがなくても）。(“A day in the life at Headquarters” by Elspeth Gray, from The Reel No.243, Feb-May 2003. By the courtesy of the RSCDS London) ■

フレージング？それともカバリング？

（バンクーバー支部　ローズマリ・クープ）

この二つのことばはカントリー・ダンスのクラスでよく使われることばで、ともに大切な意味をもっているが、ではその違いについてみなさんはちゃんとわかっているだろうか。

「フレージング」とは、音楽の各フレーズ（楽句）に踊りの各フィギュアを合わせることである。ふつう、ダンスのフレージングは音楽のそれに一致している。カントリー・ダンスの音楽は、ごくまれな場合をのぞいて８小節フレーズ（４小節単位に分解できるけれども）でなりたっている。

Ladies' chain を例にとろう。これは４小節二つ、もしくは四つの２小節からなっている。Ladies' chain のフレージングがきちんとできていれば、ダンサーはおのおのの２小節ムーブメントに音楽２小節を正しく使っていることになり、ムーブメントからムーブメントへはスムーズな流れとなる。その場所を、立ち止まることなく通過してダンシングしていることになる。

セットの他のダンサーとの関係からいって、「グッド・フレージング」は基本的な習熟事項である。フレージングのじょうずなダンサーは、正しいタイミングで、いるべきスポットにいつもいる。8小節リールで4小節目の終わりには半分の位置におり、アラモンドの4小節目ではメンズ・サイドでフェイシング・ダウンしている。

4小節ムーブメントおよび8小節ムーブメントでは、「グッド・フレージング」であればダンサーは自然にその音楽に対する反応を表現できる。しかし音楽にあっていないムーブメント(Down the middle for three, up for three, and cast off two のような)では、十分に気をくばり、たんに音楽を聞き流すのではなく、小節数を意識しながら踊るのが「グッド・フレージング」である。経験が第2の自然体をつくる、ともいえる。

では「カバリング」とはなにか？　そのムーブメントを、セットの他のダンサーと一致させて踊るのが「カバリング」である。「カバリング」はそのダンス全体の美しさを、はっきりと表わすものである。パラレルのリールズ・オブ・フォーのループで、各ダンサーが同じところでループする、というのが例としてあげられる。

また、「カバリング」は、ソシャルなよろこびやかかわり合いを高めるといえる。リール・オブ・スリーで両端のダンサーが真ん中に近づき、そして一瞬目が合えば、その2人、そしてセットの全員が、ともにダンシングしているという感覚を味わうであろう。アラモンドの5小節目で、ボールルームの長い列が一瞬サイド・バイ・サイドにそろえば、だれしもボールルーム全体の一体感を覚えると思う。

「グッド・カバリング」は「グッド・フレージング」があって表れるもので、カントリー・ダンシングの本質として大きな部分を占める。いろいろなベスト・ダンス（たとえば Bratach Bana）は、ダンサーのなめらか連続した動きが、たんにパートナーに対してではなく、他のダンサーとのかかわり合いによってベスト・ダンスとなる。

Maxwell's Rant の終わりごろに出てくる動き、つまり 1st カップルが 3rd カップルのあいだをダンス・ダウンしてオウン・サイドにキャストするとき、これがフレージングとカバリング両方がみられる場面である。1st カップルがミドルを通過するとき、そのムーブメントはサイドラインに向かって魔術のように移行してゆくのである。

フレージングおよびカバリングとも、ダンシングにおける義務ではないが、楽しみのみなもとなのである。(“Phrasing or Covering?” by Rosemary Coupe, from The White Cockade, Nov 2002. By the courtesy of R. Coupe) ■

新 CD・資料紹介 (Tom Toriyama)

(1) Leicester Branch - The Silver Collection (TRCD0302) by David Cunningham Dance Band
Wellington Street (8x32R), Swithland Woods (4x32S), The Huncote Jig (3x32J), Doris's Delight (4x32S), Flight to Melbourne (4x32R), Silver Threads (5x32S), January Jig (8x32J), If at First (3x32S), The Chorlton Reel (8x32R), The Silver Targe (1x88S), Jaunty Jack (8x32R), The Jovial Gentleman (5x48J), Daunter in the Glen (4x32S), The Heather Bank Jig (4x32J), Bonnie Buchanhaven (4x32S)

CD 化を推進中のソサエティから、つぎのアルバムが発売されている。

(2) Music for Book 2 Dances (RSCDSCD037) by Bobby Crowe & Colin Dewar and their Band
The Eightsome Reel も収録。すべて Full Length。

(3) Music for Book 3 Dances (RSCDSCD038) by Bobby Crowe & his Band
東京ブランチの援助によるＣＤ化。すべて Full Length。

(4) Music for Book 4 Dances (RSCDSCD039) by Neil Barron and his Band
アロカー・ブランチの援助によるＣＤ化。すべて Full Length。

(5) Music for Book 18 Dances (RSCDSCD040) by Colin Dewar and his Band

(6) Music for Book 31 and 32 Dances (RSCDSCD035) by Alastair Wood and his Band
新録音。Book 31 と Book 32 が 1 枚の CD に入っている。

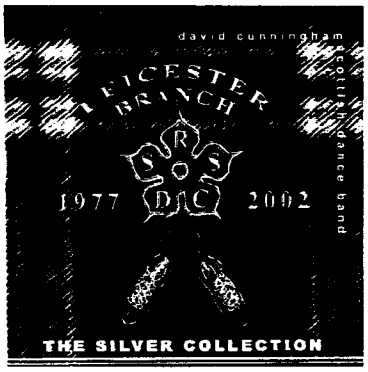
(7) Music for Book 36 Dances (RSCDSCD033) by Iain MacPhail and his Band
新録音。

(8) Music for Book 37 Dances (RSCDSCD034) by Iain MacPhail and his Band
新録音。

(9) Music for Graded Book Dances (RSCDSCD036) by Rob Gordon & David Cunningham and their Band
旧テープのＣＤ化に新録音を加え、24 ダンスすべてを収録。２枚組。

(10) Music for Preliminary & Teacher's Certificate Exams (RSCDSCD042) by M Johnstone and M Rutherford
課題ダンスの変更にともなうＣＤ。

(11) Music for Book 43 Dances (RSCDSCD041?) by Iain MacPhail and his Band
04 年 8 月中旬発売予定。



(1) は、レスター支部は 10 年前に 15 周年を記念する "The Crystal Collection"を出しているが、これはその続編。25 周年を記念して同支部会員がつくったダンス用の音楽である。やや首をひねるダンスもあるが、演奏は楽しく、しっかりしている。〔**注文略号:レスターCD、レスター・ブック**〕

(2) (3) (4) (5) は旧録音を CD に再処理したもの。ただし旧録音は 30 センチ LP という制約上、"Delvineside"にみられるとおり 4 x32 の Half Length であったが、CD では全ダンスが Full Length になっている。A+B+C+A を単に二つつなげたのか、あるいは A+B+C+A+B+C+B+A の順序になっているかはお聞きになって判断していただきたい。**(2)** はミュリアル・ジョンストンがピアノを弾き、故アンガス・フィチットがフィドルを演奏する、RSCDS アルバム中屈指の名作である。くたびれたテープをお持ちなら、買い替えをおすすめする。〔**注文略号例:Book 2 CD**〕

(6) は新録音である。旧録音ロブ・ゴードン楽団の "Autumn in Appin"は 4 分 50 秒、アレスター・ウッド楽団の新録音は 4 分 19 秒で、適正なスピードである。楽団が違えばオルタナティブもかわり、Book 31 新録音は「これが？」と感じられるかもしれない。8x32 という長さで、終わりごろにはうんざりした"Miss Nancy Arnott" も 6x32 と短くなったが、まだ長い。5x32 くらいが順当であろう。キンキンした高音がうるさく感じられた Book 32 旧録音だったが、同じ楽団でも 18 年たったいま、マイルドな音になっている。プラスチック・ケース裏側に入っているカードに印刷ミスがあり、Book 32 No.5 のあとが No.7 となっているのでご注意を。〔**注文略号:Book 31 & 32 CD**〕

(7) (8) も新録音。旧録音はいずれも五重奏団、新録音はフィドルにロン・カーが入った七重奏で豊かな音になっている。イアン・マクフェイルはアコーディオンのリーダーだが、CD ではキーボードのデビッド・フロックハートが大活躍している。昨今の流行にならって、あるいはロン・カーの好みで、A+B+C+D+E+F+G+A というオルタナティブ構成が多い。"G"に『軽騎兵序曲』などというお遊びもある。"Gang the Same Gate"は 8 分 47 秒でミュリアル・ジョンストンなみのスピード。ちなみに 1982 年録音の**(2)** の"Glasgow Highlanders"は 7 分 38 秒である。〔**注文略号例:Book 36 CD**〕

(9) はロブ・ゴードン楽団の旧録音 12 ダンスにデビッド・カニングハム楽団の新演奏 12 ダンスを加えた 2 枚組み CD である。"The Isle"や "Kendall's Hornpipe"に RSCDS 盤が登場したのはうれしい。〔**注文略号:グレイデッド CD**〕

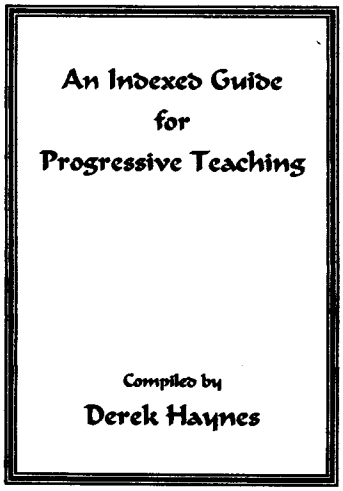
(10) は、課題ダンスの Reel と Jig に新ダンスが加えられたのにともなう CD。"Brechin Lassies "など追加ダンスはモーリン・ラザフォードが弾いている。録音スタジオのせいか、電子ピアノを使ったためか、モーリンの演奏は高音の輝きが少ないように思える。〔**注文略号:エグザムス CD**〕

さて、**(11)** の Book 43 CD であるが、本稿出稿時未入手である。バンド・リーダーのイアン・マクフェイルの病気とかで録音が大幅に遅れ、本部発売は 8 月中旬になるという。イアンはラジオの生番組で演奏するほどの腕前、できばえは期待してよいと思うが、サマースクール時に録音音楽がないというのにはじつに落胆させられた。〔**注文略号:Book 43 CD**〕

(12) Scottish Country Dance Index, 5th Edition by Keith Napier

オーストラリアのキース・ネピアが 1976 年から編集しているダンスのインデックス（目録）で、これはその第 5 版（2002 年 6 月）。1 万を超えるダンスのタイトル、小節数、リズム、カップル数、難易度、主要フォーメーション、出典が載っている。ABC 順が Part 1、フォーメーション順が Part 2 である。製本版（A4 判 123 ページ）と CD-ROM 版とがあり、どちらかというと製本版のほうが使いやすい。〔**注文略号:ネピア・インデックス本（またはネピア・インデックスCD）**〕

(13) An Index Guide for Progressive Teaching by Derek Haynes



ダンス指導において簡単なフィギュアからより複雑なものへと進めてゆく、プログレッシ

ブ・ティーチングの重要性はいうまでもない。この方法で指導するとき、では具体的にどんなダンスをとりあげるか、悩むことがしばしばである。RSCDS はビギナーズ用シラバスを出版しているが、20 年間改訂がなされず、とりあげられたダンスも RSCDS のものだけである。

ディレク・ヘインズが著したこの小冊子は、RSCDS 以外のダンスもとりいれており、一つの指針として大いに役立つと思う。 Pas de basque なしのシンプルな Reel, Jig から Poussette, Tournee までのダンスと出典をリストにしてある。記載順序によれば、ディレク・ヘインズは Reel of Three よりも Rondel のほうがシンプルと考えている。Rondel 入りのダンスが少ないだけであって、案外そうかもしれない。ポケットサイズ、24 ページ。**〔注文略号:ヘインズ・インデックス〕**

(14) Social Dances 2002 by Roy Goldring – Leeds RSCDS 40th Anniversary Book

上記ヘインズ・インデックスにもダンスがたくさんとりあげられている、ロイ・ゴールドリングの最新のダンスブック。リーズ支部の 40 年記念ブックでもある。以前の"Elizabeth Hunter's Strathspey"と同じく、Strathspey では 3 couples set のダンスが多い（余談ながら、"Elizabeth ・・・"は奇をてらいすぎ、ロイにしては失敗作である)。なぜ 3 couples dance in 4 couple set のものが少ないのか、ロイの親友のジョー・マーフィに聞いたところ、『近頃のかれのクラブは出てくる人が少なくなっているんだ』。このブックは"Elizabeth ・・・"よりも楽しいダンスばかりである。A4 判。**〔注文略号:ロイ・ゴールドリング・ブック〕**

レスターCD	**¥3,000**
レスター・ブック	**¥900**
Book 2 CD	**¥2,250**
Book 3 CD	**¥2,250**
Book 4 CD	**¥2,250**
Book 18 CD	**¥2,250**
Book 31 & 32 CD	**¥3,000**
Book 36 CD	**¥2,700**
Book 37 CD	**¥2,700**
グレイデッドCD	**¥5,000**
エグザムスCD	**¥2,250**
Book 43 CD	**¥2,700**
ネピア・インデックス本	**¥3,400**
ネピア・インデックスCD	**¥600**
ヘインズ・インデックス	**¥500**
ロイ・ゴールドリング・ブック	**¥1,000**

（いずれも送料込み）

以上の CD、ブックのご注文は
郵便振替 00240－0－ 63517
東京ブランチ

（この口座は物品購入専用です）
締切り 9月19日(金)

ブランチレター前号でご紹介のスコシア・ブック、ビデオの追加ご注文もどうぞ。
お渡し　１０月下旬　　担当　藤田淑子■

旧作 CD、ダンスブックのあっせん

新しい CD ばかりでなく、以前に発売された録音や資料がほしいというご要望があり、次号ブランチレターで、つぎの手順でご要望におこたえできるよう計画しています。

1. **次号ブランチレター**に、ご要望のダンスを記入する用紙を同封する。
2. ご要望のダンスを記入して、ブランチショップ担当に送っていただく。
   例:Midnight Oil
3. ブランチで CD、ダンスブックの入手可否、価格を回答してご返却する。
4. ブランチ回答にもとづき、ご注文いただく。

グループ行事案内

イングリッシュ・カントリー・ダンス講習会
9 月 13 日（土）－14 日（日）
日本女子体育大学・第 6 体育館
連絡先　池間博之　045-982-8528

日本スコットランド協会
第 21 回スコットランド・ハイランド・ゲームズ
10 月 19 日（日）10.30-16.30
上野学園草加キャンパス
（松原団地西口下車）
¥1,500
連絡先　岡田昌子　03-3811-7174

仙台アイリッシュ・ローバーズ
第32 回秋の交歓合宿＆パーティー
10 月 25 日（土）－26 日（日）
秋保グランドホテル紅葉城
仙台市太白区秋保町
申込み締切り　10 月 10 日(金)
¥16,000（日帰りの場合減額）
連絡先　遠藤三十五　022-285-7013

新潟スコティッシュ・ダンス・クラブ
パーティー
10 月 31 日（金）12-3.00
新潟市音楽文化会館・11 練習室
¥500
連絡先　地主以祢子　025-268-3675

次号は 11 月発行予定。11 月-2 月のお知らせ乞う